

シリーズ「グローバル・ジャスティス」

第 57 回 『女を修理する男(*The Man Who Mends Women*)』上映会

(ティエリー・ミシェル&コレット・ブラックマン監督、2015 年、ベルギー、117 分)

今回で第 57 回を迎えるシリーズ「グローバル・ジャスティス」においてドキュメンタリー映画『女を修理する男(*The Man Who Mends Women*)』が上映された。本作品はルワンダ内戦終結後に勃発した隣国、コンゴ民主共和国東部における紛争下での大規模戦時性暴力の問題を取り上げた作品である。また、その紛争の渦中に身を置き、暗殺未遂という恐怖を感じながらも、数多くの戦時性暴力のサバイバーたちの心身を救ってきたデニ・ムクウェゲ(Denis Mukwege)医師の正義への意志と尽力を私たちに伝えてくれる作品でもある。

ツチ族とフツ族の対立と、ジェノサイドで知られるルワンダ内戦に比べ、コンゴ民主共和国で起きていた痛ましい戦時性暴力の実態を知る人がどれほどいるだろうか。この映画が日本で初公開されたのは 2016 年 6 月の立教大学での上映会である。この上映会を皮切りに全国各地で上映されてきた。日本とコンゴ、遠い両国が戦時性暴力という問題をめぐって決して無関係ではないことを知る上で非常に大事な機会であったと思う。

映画の中で印象的であった点を 3 点ここでは挙げたい。1 点目は、戦時性暴力のあまりにも酷い実態である。性暴力は、性欲に起因しているのではなく人間社会における文化的な暴力として認識されているが、本作品からは特に明白な武力手段として性暴力が使われていることがよくわかる。例えば、生後 2 か月の赤ん坊や 8 歳の幼い少女への強かんは彼女らを心身ともに深く傷つけることで、彼女らに関係するあらゆる人々を打ちのめし意気消沈させてしまう、という意味を持つ。高価な武器等を用いることなく、また多くの場合に「不処罰」に終わる「最も効率の良い」武器として性暴力が利用されている。2 点目は、ムクウェゲ氏も繰り返し主張していた「鉱山資源によって、一部の者が利益を得るために女性たちが犠牲になっている」ということだ。そして映画を見る私たちの心を重くさせるのは、その鉱山資源は私たちが日常的に使っている電子機器の部品に使われているという見過ごせない事実である。遠い国の映画の中の女性たちの被害が私たちの生活と直接つながっていることに気づくことができる。そしてまた、その指導者の多くが男性であるグローバル経済の発展と女性に対する人権侵害という構図が浮かび上がってくる。この仕組みへの先進国の女性たちの加担をどのように克服できるのだろうか。それが本作品を通して強く投げかけられた私たちに対する問いかけではないだろうか。3 点目に、女性たちの過酷な状況でも生き抜く力に希望を見出したことを記しておきたい。性暴力に抗う地元女性たちの組織やサバイバー 1 人ひとりの生き方や、しなやかな「強さ」が印象的であった。サバイバーたちが悲しみや苦しみを人々と分かち合い、寄り添い、乗り越えようとする姿に本当の「強さ」を痛感した。

最後に、戦時性暴力・性奴隷制を考える際には日本に住む私たちこそが敏感でいなければ

ばならないのではないか、と振り返りたい。他国で起こった凄まじい暴力が、私たちの国の軍隊がかつて行ったことと無関係であると考えてはならないと強く思う。そしてまた、現在の私たちもグローバル化された社会の中で、否応なく誰かの犠牲の上に暮らしていること、それらは克服されねばならないということを意識していなければいけないのではないだろうか。戦時性暴力という、一見特殊な出来事が私たちの日常生活とどれほど密接に関連しているのかということに注意を払い続けなければいけないし、それらを解決するための努力が必要だということを本作品は私たちに訴えかけているのではないだろうか。また、そのような努力は孤立した個人の努力ではなく、本作品の中の女性たちのようにお互いに経験を分かち合い、支えあいながら積み重ねていくものだと思える。

(文責：相方 未来)